



**たけやす・ひでこ** ●1950年大阪府生まれ。1973年天理大学外国語学部卒業。1979年関西学院大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。追手門学院大学教授を経て、2000年京都女子大学現代社会学部教授。2016年同大学名誉教授。2017年同大学特命副学長。2020年より現職（同大学初の女性学長）。専門は社会学。著書に「近代化と家族・地域社会」など。

# 多様な女性の「らしさ」を「つよさ」に変える大学へ

## 自由に発言・行動できる環境で、伸びやかに生きる女性を育成

### 男女の格差が大きい日本社会の現状

かつて日本の社会では、性別役割分業の意識が強く、社会で果たす役割や選択できる職業に男女で明らかな違いがありました。良妻賢母となることや、保育や看護の仕事に就くことが、女性らしい。

子大学にはありません。男性の前では遠慮がちに振る舞う日本の女性も、女性だけの環境ならば、自らの持つ能力を自由に発揮しやすいはず。人は、自由な空気を一度味わうと、決してそれを忘れません。女子大学で、ジェンダーバイアスを離れた自由な雰囲気味わうことは、自分の心を生涯解放することにつながります。

さらに女子大学では、あらゆる活動を女性だけで行わなければならない。先頭に立って組織を引っ張る役も、外部の人と折衝する役も、全てを女性が務めます。こうした経験は、意思決定の分野で活躍する力や資質を養う貴重な機会となるでしょう。交渉術を身に付け、リーダーシップを発揮できる女性が、例えば地域社会の中で意思決定の場にどんどん入り込んでいけば、女性が住みたいと思う街、子育てをしたいと思う街が実現できるはず。そうすれば、大きな社会問題となっている少子化の克服にもつながると思います。

### 女性への「期待」を伝え「経験」を後押しする

自らを解放し、さまざまな経験ができる女子大学のよさを、最大



## 荒波に挑むトップ 私の改革論

No.39

京都女子大学・学長

竹安栄子

京都女子大学 ●1920年に開学した京都女子高等専門学校が前身。1949年、京都女子大学開学 ▶5学部10学科5研究科、学生数約5800人 ▶建学の精神は、「親鸞聖人の体せられた仏教精神にもとづく人間教育」 ▶2011年に女子大学で初となる法学部を開設。2019年には発達教育学部にて教育学科・福祉教育学専攻、心理学科を設置

取材・文/仲谷宏 撮影/谷口哲

### 個々の意識を育む 女子大学の教育環境

日本の男女格差が大きい要因の一つとして、意思決定分野における女性の少なさがあります。女性の活躍は、社会のさまざまな分野に広がっていますが、組織の意思決定は、男性中心であることがほとんどです。これには、男性の前では一歩下がってしまいがちな女性の意識が関係しているのではないのでしょうか。長期にわたる男性優位の社会が続く中、男性の目を常に意識して行動する習慣が、女性の内面に刷り込まれているのです。

そうしたジェンダーの価値観から離れて、「個」として、自分らしく、自由に行動できる環境が女子大学にはあります。もう介護しか残っていない」と、つぶやく彼女たちに必要なのは、再び社会に踏み出すために、「私は働きたい」と周囲を説得する力です。

一方、eラーニングコースと土曜日通学コースは、AIリテラシーなどを身に付けて、スキルアップをめざすビジネスパーソンが中心です。女性の多様性に対応できるように、講座とキャリアアカウンセリングを充実させて、きめ細かな支援を実現していきます。私の願いは、全ての女性が「女性だから」といって、自分の生き方を諦めないこと。女性が自分らしく、しなやかに生きるための改革を、今後も進めていきます。

とされ、女子大学はそうした生き方・働き方を実現する手段として存在意義を発揮していました。

時代が変わり、男女共同参画社会の実現に向けた法整備などが進むと、女性が活躍できる分野は広がりが、生き方・働き方も多様な選択ができるようになりました。そのような変化の中、本学は現代社

限生かすことに本学では取り組んでいません。その一つが、地域連携研究センターで開講している「女性地域リーダー養成プログラム」（副専攻）です。これは、さまざまな企業やNPOなどからゲストスピーカーを招いて、女性への期待を語ってもらうもので、全学部生が履修可能です。自分たちがいかに社会から期待される存在であるかを実感すれば、新たなことに挑戦する勇気が湧いてきます。加えて、社会問題を他人ごととせず、自ら解決に取り組む人たちとの交流は、学生の当事者意識を高めます。

学生の主体的な活動を後押しする制度としては、「らしつよチャレンジ」があります。これは、本学のミッションである「らしさをつよさに未来をひらく」を体現する活動を支援する制度です。本年度は8つの取り組みが動いています。例えば、ITクリエイティブ活動に取り組む団体は、高校生のために、バーチャル学部見学会を自主開催するなど、コロナ禍で大学への入構が制限される中でも、自分たちが今できることを考えて、活動しています。

本学では2010年度から、大規模なキャンパス改修を進めており、学生が集い、対話し、つながり、

会学部や法学部を設置するなどして教育の幅を広げ、キャリア形成支援の拡充を図ってきました。一方、共学校でも女子学生の獲得を意欲した学部の新設などが行われ、教育内容における両者の違いは、次第に薄れてきました。

では、このような社会の変化の中、もはや女子大学は存在意義を発信できる場の充実を図っています。学生の主体的な活動と、生まれ変わったキャンパスとが結びつければ、さらに活動のレベルアップが期待できます。

社会で生きていくロールモデルとしての女性教職員の存在も、学生に好影響を与えています。子育てと仕事の両立に取り組む先輩からは、普段の会話の中で実感があったアドバイスがもらえます。それは学生たちにとって「何とかやっていける」という将来に向けての自信となることでしょう。

### 自分らしい生き方を生涯にわたって支援

社会人向けのリカレント教育にも、現在力を入れていきます。本年度からは、平日昼間に通学するコースに加え、eラーニングコースと土曜日通学コースを新設しました。

平日通学コースは、出産・子育てなどでキャリアを中断した30〜50歳の女性を中心で

## 注目の経営指標

### キャンパスが生み出す価値



2010年度から、多額の財源を投資してキャンパスの大改造を実施。これまでに8棟の新築と2棟の増築、5棟の全面リニューアルなどを行ってきた。学生が集い、対話し、つながり、発信する機能を高めたキャンパスを活用して、新しい価値の創造やSDGsの推進を積極的に図っていく考えだ。